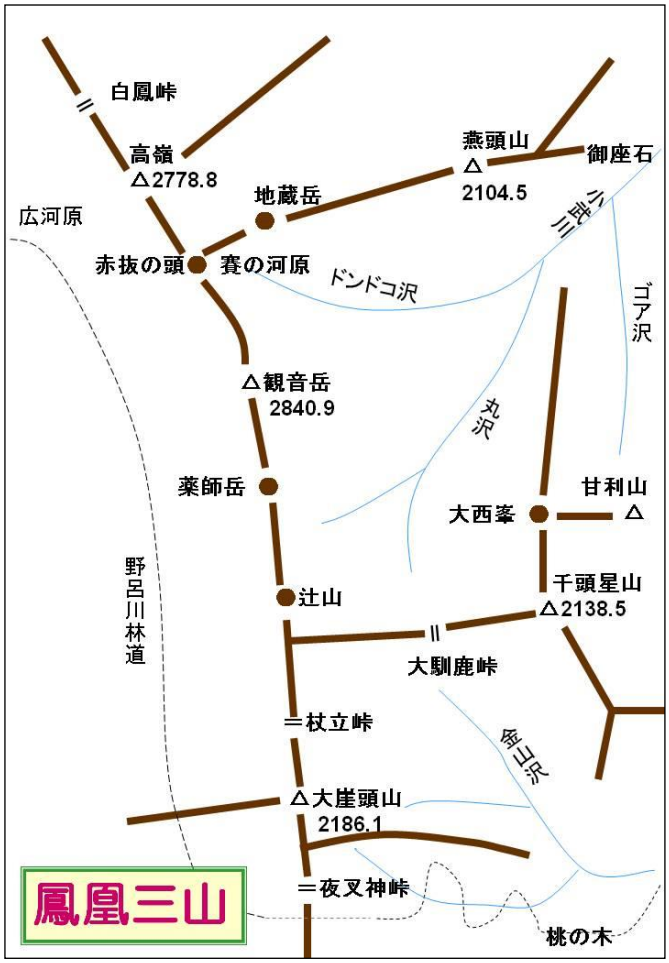
踏 み 跡 ＜ My mountains ＞

南アルプス	鳳凰三山縦走	No.032



鳳凰三山、南アルプスでは甲斐駒とともに有名な山である。だが、東京から中央線で笹子トンネルを抜けるとすぐに甲府盆地の向う岸に見られるということまで知っている人は案外少ない。
約1200年前に孝謙天皇（女性）の子である奈良王が甲斐の国に流された。その地が現在の奈良田で、奈良王が山に登り遠い都を慕ったというのが鳳凰三山だという伝説がある。すなわち、この伝説を基にして「法王」転じて「鳳凰」ということらしい。また、山麓にある御座石鉱泉の名も奈良王が休息の為に腰を下ろした大きな石があることから付いたといわれている。
鳳凰三山は、地蔵ケ岳2780m、観音ケ岳2840m、薬師ケ岳2762m の三山をいう。これらの山を南にたどれば夜叉神峠に出るし、北にたどれば早川尾根を経て甲斐駒ケ岳に連なっている。
南アルプスの2800m峰は初めての体験なので小屋泊まりではあれ緊張する。

昭和39年8月7日
いまや我が親友となった新宿発23時45分各駅停車長野行、星空の下を出発。真夏のことだから多分相当混んでいたと思うが、そのことについては何もメモに残っていなかった。

昭和39年8月8日（快晴）
韮崎3時58分着、駒ケ岳神社へ行くバスに乗り穴山橋で下車。（60円）
しばらく待ち、予め申し込んである御座石鉱泉のマイクロバスに乗り込む。乗客は計10名で一人当たり200円。小武川（こむがわ）を遡る45分間のドライブ。うまい具合に助手席に座ったため景色は充分に楽しめる。夜行列車の寝不足からウトウトし始めた頃御座石鉱泉に到着（5時45分）。鳳凰の懐、標高1200mにある静かな温泉だ・・・・と思ったら、宿の中では多数の登山客があわただしく朝食や身支度で右往左往する姿が見えた。約30分床に腰を下ろして朝食。あまりゆっくりしていると眠くなりそうなので6時15分に出発。宿の裏口を抜けて燕頭山への道に入る。
西平（1350m地点か？）までは苦しい登り。緑の木々の間に朝日のぎらつき、睡眠不足の目には痛い。
時刻は8時、少々腹も減ってきたので30分の軽食と中休止。甲斐駒の尖った頂上が見えるあたりから比較的楽な登りになり、やがて笹の繁茂する燕頭山（2104.5m＊註）に到着、9時45分。
ドンドコ沢を挟んで観音岳、薬師岳の白い花崗岩の稜線が間近に見える。昼食と長い休憩をとった後10時55分に出発。一時間半程さしたる起伏のない尾根道を抜けると、今日のゴール地点である鳳凰小屋に12時15分に到着。ここは海抜 2382m、ドンドコ沢の水源になる場所で水は豊富にあって安心できる。
まだ昼を過ぎたばかりで、日は高く暑く照りつけてくる。短パンにはき換えて空身で地蔵岳を往復。
針葉樹林を抜け出たところは白砂の斜面。これを登りつめると、安産、子育て祈願の置き地蔵が並ぶ賽の

河原、首の曲がった地蔵の横に傷ついた標識が一本。まだ緑色のナナカマドを見やりながらオベリスクへ向かう。地蔵仏と呼ばれるオベリスクは鳳凰の象徴、甲府盆地のあらゆるところから筆の先のように尖って見える。今、その足元で眺めると、筆先どころではなく堂々たる大きさで空を突いている。ウォルター・ウェストンはこの筆先によじ登るために、端に石を結びつけたザイルを投げ、チムニーの裏側に引っ掛けて懸垂したという。そのチムニーの真下あたりまでは誰でも登れる。ビブラムの靴底は花崗岩に快適にくっつき登りやすいが残念ながら我が力量にしてオベリスクの上に立つのは不可能。

チムニーを見上げ、野呂川から上るガスに消されていく北岳のかすかな姿だけを眺めて小屋へ戻った。

夕食は小屋の前の小さなせせらぎで、しかも思いもよらず女性と二人でとはオツな・・・。彼女は単独行、夜叉神峠を朝出て今日ここまで来たという。互いに食糧を出し合って山談義をしながらの食事。憶えていることは、我が手製なるコンビーフ入りキャベツの味噌汁をご馳走したことと、彼女がリプトン紅茶をご馳走してくれたこと。高校二年の時にワンゲルで歩いて以来の山歩き？年選手とのことだった。彼女の山歴などを聞いていると、体力的にも男性に勝るものを持っているようだ。話の内容から私よりひとつぐらい先輩ではないかなと感じた。落日の冷気が漂うまでのんびりと語らい、小屋の中に入った。小屋の中では隣の寝袋の男と意気投合し、彼の煎餅をご馳走になりながら、また山の話。彼は平川峠を越えてきたと言う。明日の予定は私と同じらしい。言葉の感じからすると甲斐か駿河の人のようだ。寝袋に入ったのは19時半頃だったが、結局目を閉じた時はもう20時に近かった。

昭和39年8月9日（快晴）

3時起床の予定だったが、目が覚めたら3時40分だった。遅くまで雑談したのがいけなかったか。彼も「寝すぎた」 と言いながら4時に起きてきた。食事をせずに4時に出発。昨日の道を再び賽の河原まで登ると、野呂川の向こうに北岳の正三角形の偉容。地蔵岳5時。大樺沢に小さく残った雪が偉容をさらに偉容たらしめている。朝日を受けてバットレスは細かな岩目まで見せている。観音岳（6時）、平坦な頂上で風を除けて景色の見える場所を選んで朝食。

いささか面倒くさくもあったろうか、昨晩の残りの飯に沸かしたお湯をかけて、福神漬けをつけてお茶漬け。はしたないと言うか貧乏臭いと言うか・・・ま、それより支度が簡単なのが一番だ。お茶漬け腹を休めながら四方の景色を眺めると、北岳は言うに及ばず、その右肩に仙丈ケ岳、駒ケ岳、八ヶ岳も奥秩父も、それぞれ朝の清々しい空気の中で独特の佇まいを見せてくれている。

＜上写真：赤抜の頭付近にて（後ろは北岳）＞

日が昇る前までは黒々と空にシルエットのみを描いていた奇妙な形のオベリスクも、朝日にその姿を見せ始め、夏の一日が始まった。こちらも7時10分に出発。

三山の最南端薬師岳には7時25分に到着。ハイマツの御殿で二つの小さな岩の間に富士山が顔を出し、ハイマツの緑の畳も素晴らしい。ハイマツの上に乗るように見える八ヶ岳の峰々もまた格別の美しさだ。

北から順に、甲斐駒・仙丈・北岳・間ノ岳・農鳥・・・荒川岳・塩見岳あたりまで読み取ることができる。絶景に見とれているうちに出発が8時10分になってしまった。

南御室小屋（2436m）9時05分、樹林帯に入り稜線のような涼風は得られず、蒸し暑い。水を補給して9時55分出発。苺平（2514m）10時25分、杖立峠（2180m）11時25分、夜叉神峠が近くなるにつれ、山道には様々なゴミが散乱し始め、下界の観光地が近いことを目で感じる。

夜叉神峠（1760m）12時15分、井上靖氏も絶賛した夜叉神峠からの白根三山は今日も夏空にくっきりと

姿を見せている。トンネル口（1372m）に下りてしまうともう見えなくなるのでこの景色をおかずに最後の昼食。ゆったりと景色を楽しみ、写真を撮って14時25分に下山開始。
夜叉神荘前のマイクロバス乗り場に14時55分に到着。まだ時間が早いのと体力の残りがありそうなので、マイクロバス代（100円）を節約して、麓の芦安鉱泉（800m）まで旧道をのんびりと自分の足で下った。
芦安到着は16時10分。バスで甲府に出たが、中央本線は満員、床に腰を下ろして、北八ヶ岳（通称：キタヤツ）へ行ってきたという隣の人と雑談。話が弾み、彼が下車する八王子まで喋り続けた。

以上

（修正・更新：2023年10月）

＊燕頭山
この山行の頃には「つばくろあたまやま」と言うのが一般的だったが、2023年に再確認してみたら
「つばくろやま・つばくろあたまやま」と併記されていた。山名も時代によって変るものらしい。